

ウア・ブルシェンシャフト 1815-1819

——ヴァルトブルク・ゲーテ・学生運動——
(その1)

杉 浦 忠 夫

目 次

1. 1992年ヴァルトブルク記念祭
2. ゲーテとヴァルトブルク
3. 1817年10月18日のヴァルトブルク祭
4. ヴァルテンベルクの狂乱の夜
5. 焚書事件——マースマンとヤーン
6. 1817年10月19日——カロヴェの演説
7. ウア・ブルシェンシャフト——成立から挫折まで
8. ドイツ最初の学生運動と1817年ヴァルトブルク祭の意義

1

ドイツ語文化圏各地に散在する多数の由緒ある古城のうち、ヴァルトブルクは、その来歴と伝承の古さと豊かさによってだけではなく、ドイツ文化の歴史的な代表者たちとの触れ合いの深さと、ドイツ史の大きな節目を刻印づけた諸事件との深い関わりによって、ひととき異彩を放っている。本年(1992)、ヴァルトブルクは、「1992年ヴァルトブルク記念の年」と銘打って、築城後925周年、ルターの宗教改革開始後475周年、ドイツ・ブルシェンシャフトのヴァルトブルク祭175周年に当る三冠記念の年として多くの観光客を

呼び寄せている (Wartburgjubiläen 1992——925 Jahre Wartburg-475 Jahre Beginn der Lutherischen Reformation-175 Jahre Wartburgfest der deutschen Burschenschaft)。再統一後のドイツ各地から引きも切らずに押し寄せる訪問客の大群を見るにつけても、ヴァルトブルクはもはや中世伝来の辺境の記念碑的古城であることを越え、更には中世騎士文化華やかなりし頃の歌合戦の舞台であり、聖女エリーザベトの居城であり、ルターの名と深く結びついたプロテスタントの聖地 (いわゆる“Lutherburg”) であったという歴史的記念の地であることをはるかに越えて、今やドイツ国民統合の象徴的記念の地でさえあるとの感を事更¹⁾に強める。

ヴァルトブルク die Wartburg は、テューリンゲンの森 Thüringer Wald の北西の端に位置して、「ルターとバッハの町」アイゼナハ Eisenach を400m の山頂から900年以上にもわたって見下ろしてきた。伝説によれば、ヴァルトブルクは1067年にテューリンゲン方伯ルードヴィヒ跳躍王 Landgraf Ludwig der Springer (在位1056—1123) によって築城されたという²⁾。以後ヴァルトブルクは、ドイツ中世文学の二大詩人ヴォルフラム・フォン・エシエンバッハとヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ、およびその他の宮廷恋愛歌人たち Minnesänger による有名な「ヴァルトブルクの歌合戦」der Sängerkrieg auf der Wartburg の舞台となることによって、中世騎士文化の一中心的な城館であることを示すとともに、その無私の気高い慈善行為によって聖女に列せられた (1235) 方伯妃エリーザベト (城主のテューリンゲン方伯ルードヴィヒ 4 世 [在位1217—27] の寡婦) の敬虔な生涯によって、聖俗両界にその名が広く喧伝された。

だがヴァルトブルクを文学史や宗教史にその名を残すだけの中世紀的・地方的なブルクにとどめるだけではなく、全ドイツの国民的な文化遺産たらしめた歴史的な原動力といえ、それは16世紀はじめの宗教改革運動と18/19世紀転換期のドイツ運動、および19世紀の国民国家形成を目指すナショナリズム運動という、近代ドイツを形成する激変の時代に、このヴァルトブルク

に去来した強靱な個性の人物たちの活動である。先ず挙げられるべきは、何とんでもマルティン・ルターの名である。

一般的通史が教えるように、ルターは1521年にヴォルムスの帝国議会によって追放刑を受けたが、ザクセン選帝侯フリードリヒ賢侯の庇護のもとに、ヴァルトブルク城内にかくまわれた。ルターはこの滞在期間中(1521年5月－22年3月)に、新約聖書をギリシャ語原典からドイツ語への翻訳事業に専念した。聖書を独訳するに当ってルターは、全ドイツ人に聖書を読むことのできる機会を与えるために、方言を超えた共通の統一的ドイツ語を新たに作り直したが、これは同時に現代のドイツ文章語、すなわち、新高ドイツ語の基礎を作る作業でもあった。これは以後のドイツ文学に新しい生命を、言うなればドイツ国民文学への道を拓く機縁を作った一大記念碑的の事業であった。こういうわけで、ルターのヴァルトブルク滞在の意義は、国語の純化作業によるドイツ統一の先駆的な業績であったと言ってよい。

宗教改革の始まりとされる1517年のルターの「95か条の意見書」の発表から475年が経過したが、ルターの聖書独訳のもたらしたその国民的・宗教的意義のゆえに、ヴァルトブルクは475周年記念に関わりなく、ドイツ・プロテスタントの聖地たることに変わりはない。今なおヴァルトブルクを訪れる観光客の第一のお目当ては、いぜんとしてルターの聖書翻訳の仕事部屋(Lutherstube)³⁾の参観である。

2

ヴァルトブルクを中世の歌合戦とルターの聖書翻訳事業の舞台であったというだけの伝統的古城から、更に進んでドイツ史の歩みに消えることのない一大足跡を印する歴史的・国民的な記念の地に高める機縁を作ったのは、1800年を挟む前後40年間(1777－1817)のことである。それはゲーテのヴァルトブルク初訪問から、1817年10月のプルシェンシャフトの第一回ヴァルトブル

ク祭に至る40年間であり、フランス革命とナポレオン軍のドイツ占領、プロイセン軍の大敗とプロイセンの内政改革、解放戦争の勝利と立憲的なドイツ統一国家を目指すナショナリズム運動、新人文主義に基づく新構想のベルリン大学創設と教育制度の改革など、政治的・社会的・精神的に大きな激動期に当る40年であった。

ゲーテは、ヴァイマルのカール・アウグスト公（1815年以降は大公）の許に身を寄せてから2年後、1777年9月9日に初めてヴァルトブルク（ヴァイマルから西へ80km）を訪れた。朽ち果てた荒城の本館とその内部の居心地の悪さはゲーテを一驚させたが、周辺の展望は若きゲーテに圧倒的な感嘆の声を呼び起こさずにはおれなかった。「巨大な屋根と小さな窓をもった飾りもない荒涼たる粗末な建物で、その内部には名状し難い居心地の悪さが充満している」と、到着したときの本館（パラス）の印象をゲーテはこう述べたが、ヴァルトブルクの周辺に広がる景観がどれほど鮮烈な印象を28歳のゲーテに与えたかは、最初の訪問から4日後に再びヴァルトブルクを訪れて宿泊したさいに、9月13日から16日にかけての4日間にフォン・シュタイン夫人に宛てて書いた長文の手紙のなかに、十分読み取ることができる⁴⁾。

ヴァルトブルク周辺の景観の美をシュタイン夫人に綿々と綴ったと同じ時期に、ゲーテは友人ケストナーに宛てて（城内のルターの仕事部屋を聖ヨハネが流されたパトモス島に比しながら）こう書く。「私はルターのパトモスに住んでいます。そしてルターと同じく気分は快適です。ともあれ、私は私の知っているすべての人々のうちで最も幸福な男です⁵⁾」。テューリンゲンの森の美観の嘆賞もさることながら、ゲーテのヴァルトブルク滞在中のルター体験は重要な意味をもつ。もしこの体験が基礎になれば、ヴァルトブルクの建築物の改補修工事と美術品蒐集に寄せるゲーテの厚い思い入れは、恐らく実現不可能であったであろうからだ。

ゲーテはザクセン・ヴァイマル公国（1815年以降はザクセン・ヴァイマル・アイゼナハ大公国）の領主カール・アウグスト（大）公の信頼厚き友人兼政府

高官として、その立場を存分に生かしながら、領内のヴァルトブルクをルターの精神的遺産の保存だけではなく、すぐれたドイツの古美術品や武具類を大勢の愛好家の観覧に供する国民的展示場にしようと努めた。そのために大広間（現在、東側中央の窓際の天井から1817年のヴァルトブルク祭に持ち込まれた黒赤金のブルシェンシャフト旗〔実はコピーだが〕が垂れ下がっている）に「古代様式」の窓を取り付けたり、肖像画のギャラリーを設置するよう指示するなど、ヴァルトブルクの建築物の補改修作業に努力を傾注した。⁶⁾

ゲーテのヴァルトブルクへの思い入れはこれだけにとどまらなかった。1815年の最後のヴァルトブルク訪問までに、何度かかれは山上に滞在したが、1820年には70歳を過ぎてもお、自然科学研究のためにアイゼナハ近郊を訪ねた。とりわけ1829年、死の3年前、80歳に近いゲーテは、気象観測用の施設をヴァルトブルク城内に用意するよう指示して、本館内にコンパス・カードを備えさせたほどであった。⁷⁾

1777年の初訪問以降、ゲーテが身をもって示したヴァルトブルクの歴史的・国民的意義の顕揚は、やがてヴァルトブルクを単なる観光の関心を抱かせる古城であることを越えて、ドイツの立憲的国民国家の形成を求める政治的革新運動の精神的拠り所とさせるに至った。近代への激変期とも、三月前期とも、ドイツ運動の時代とも、ゲーテ時代とも、呼び名は何であれ、革新的な運動とその時代感情（romantisch, national[istisch], liberal-demokratisch と、主義・志向・手段は異なれ）が、その展開の中軸をヴァルトブルクに求める気運を自ずと醸成するに至ったとしても不思議はない。

フランス軍によるプロイセン軍壊滅（1806）で味わった屈辱感とフランス軍のドイツ占領に基因する反仏感情も、フィヒテの愛国心鼓吹の大演説（1808）と解放戦争への若い知識人・学生の積極的な参加とその勝利も、ヴァーン会議によるドイツ連邦成立（1815）後の立憲的統一国家成立の挫折感と、それらの体験をバネとするすべての革新運動も、やがてはその基軸をヴァルトブルクに求めることになる。すでにザクセン・ヴァイマル・アイゼナ

ハ大公国は、ドイツ連邦の領邦諸国家に先駆けて憲法を制定（5・5・1816）し、憲法発布への国民の要望にいち早く応えた。また「ドイツの統一と自由」と「学生生活の刷新」を旗印に結成された最初の組織的な学生団体「ブルシェンシャフト」の成立（12.6.1815）も、ゲーテの管理監督下にあったほかならぬイエーナ大学においてであった。ゲーテとカール・アウグスト大公のお膝元のヴァイマル・イエーナは、ドイツ連邦中最も多くの自由を享受できる唯一の地であるとともに、（それあるがゆえに）誰も知るドイツ古典文学・哲学を开花させた唯一最大の土地であった。

ルターとゲーテの名と分かち難く結びつくアイゼナハのヴァルトブルクが、やがて国民国家の形成を目指す運動の唯一の舞台となる日は遠くなかったと見てよからう。1817年10月18/19日、成立後2年目のイエーナ大学ブルシェンシャフトの学生たちが、全国的な学生組織を結成するためのデモンストレーションと、解放戦争勝利4周年と宗教改革300周年を記念する祝典を、ほかならぬヴァルトブルクで挙行することに決定したとき、祝祭の精神のお膳立てはすっかり出来上がっていたと言ってよいだろう。⁸⁾

ここで一人の特異な人物を登場させないわけにはいかない。ミネゼンガー、聖女エリーザベト、ルター、とりわけゲーテ、これらヴァルトブルクの歴史にその名を刻んだ諸人物と、その人格・行動・経歴において全く異質の（とはいえ、その熱狂的・編執狂的な面ではルターに比せられはするが）男である。1814年7月24日、「古ドイツ風」の旅装に身を包んだ一人の偉丈夫がフランスからの帰国の途次、ヴァルトブルクに立ち寄った。その愛国主義的弁舌と強引な行動力でもって学生に解放戦争への参加を呼びかけるとともに、自らも志願兵として戦うことによって学生組織の結成に積極的役割を果たした「体操の父ヤーン」Friedrich Ludwig Jahnであった。ブルシェンシャフトの生みの親にも擬せられるこの男は、その日の来客用記念帳に次のような文句を書きつけた。

「大きなことが起こった。もっと大きなことが起こるだろう。ドイツの

世界の朝は始まったのだ⁹⁾」

ヴァルトブルクを何かの運動なり騒動なりの発火点だか決起の舞台だかにさせずにはおかないことを予期させるか暗示させるかのようなこの文面は、その3年後のヴァルトブルク祭によって現実のものとなった。

3

1817年10月18日の朝6時、アイゼナハの町中の鐘が鳴り響き、ヴァルトブルクの学生祭の開始を告げた¹⁰⁾。8時、第二の鐘とともにアイゼナハの中央広場に数百名の学生の大群が集合した。宗教改革300周年記念と開放戦争勝利4周年の式典とともに、ブルシェンシャフトの全国的組織の結成準備会を、10月18・19の両日、ルターゆかりの地ヴァルトブルクで挙行しようという、イエーナ大学ブルシェンシャフトの招請状(11.8.1817)に応じて集まった学生たちであった。その大部分は招請状が送られたプロテスタント系大学の学生で、総勢約450名であった(当時のドイツ連邦内の大学生数約9,000人からすると20人に1人の割となる¹¹⁾)。町当局は、ヴァルトブルク祭参加のためにアイゼナハに集まった学生たちに、宿泊と式典挙行にできるだけ便宜を図るようにとのヴァイマル政府の指令に全面的な協力を惜しまなかった。しかしそれはともあれ「古ドイツ風」と称する黒い裾長の上着を着込んで、長髪頭に大黒頭巾風の、またヒサシ付きの学生帽をかぶり、おまけに頭部に柏の葉の飾りを付けた見慣れぬ異形の集団は、アイゼナハの市民たちに一種異様な印象を与えたであろうことは想像に難くない。

8時30分、出発を祝う鐘の音と楽隊の演奏に送られて、学生集団はヴァルトブルク山頂を目指して二列縦隊で出発した。隊列の先頭集団の先導役は、参加者名簿の署名第一番のイエーナ・ブルシェンシャフトのシャイドラー Karl Herrmann Scheidler が、イエーナ・ブルシェンシャフトの記念の剣を捧げ持って努めた。それに続き四人の幹部が、そしてそのあとに、上から赤・

黒・赤に三等分した中央部分に金糸で刺繍を施した柏の葉を斜めに突き出したイエーナ大学ブルシェンシャフト旗（現在の黒・赤・金のドイツ三色旗 Schwarz・Rot・Gold—die deutsche Trikore の原形をなす）が、折りからの秋の空にはためいていた（正旗手のあとに4名の交代旗手が続いたが、そのうちの一人がコツェプーの暗殺者として歴史にその名を残すことになったザント Karl Ludwig Sand である）。黒・赤・金の三色は、ブルシェンシャフトを結成（12.6.1815）したイエーナ大学の指導的學生たちの大部分が、解放戦争時代にリュツォー義勇軍団 Lützower Freikorps の兵士として着用した軍服（高い折襟の黒い裾長の上衣と、襟の最上部と袖口の赤い縁取り、それと胸の二列の金ボタンと肩章の金縁¹²⁾）に由来する。黒赤金の三色は、祖国の自由と統一のために身を包んで戦った軍服の思い出に連なる「ドイツの自由と統一と名誉」のシンボル・カラーであった（ヴァルトブルク祭で初めて公衆の面前に据えられたイエーナ・ブルシェンシャフトの三色旗は、やがて上から縦三等分の黒・赤・金の三色旗として1832年のハムバハ祭と1848年の革命運動に用いられ、のちヴァイマル共和国とドイツ連邦共和国の国旗となった）。

10時近く、一行は山頂に到着した。そこにはすでにイエーナ大学の有名な4教授、哲学者フリース Jakob Friedrich Fries, 医学者キーザー Dietrich Georg Kieser, 自然科学者オーケン Lorenz Oken, 法学者シュヴァイツァー Christian Wilhelm Schweizer と、そのほかアイゼナハ町当局と多数の賓客が到着して学生の来着を待っていた。学生・教授・来客ともども（おそらく全員厳肅かつ高揚した面持ちであったろう）本館大広間 Festsaal に入った（大広間はこの時は、現在見られるような——19世紀後半に始まる大改修によって——華麗かつ色彩豊かな広間ではなく、何の装飾もない、小さな窓があるだけの板張りの荒廃した広い空間であった）。

式典はまず短い祈り、ルターのコラール「神は我がやぐら」“Ein' feste Burg ist unser Gott”の合唱で始まった。開幕の記念演説は23歳のイエーナ大学神

学部学生リーマン Heinrich Hermann Riemann が行なった。リーマンは解放戦争時にリュツォー義勇軍の志願兵として参戦し、プロイセン少尉として鉄十字章を授与されたのちに、イェーナ大学に復学し、やがてここで学生生活の刷新とドイツの自由と統一を目指す学生団体ブルシェンシャフトの組織化に最大の寄与を果たした指導者であった。それだけに全国学生の集まった祝典の最初の演説者として、リーマンほどに最適の学生は他にいなかったであろう。リーマンはまずルターを精神の自由のために戦った偉大な闘士として賞賛し、1813年の解放戦争の参加者たちを高く評価したうえで、ドイツの現状について次のように語った。¹³⁾

「あの戦争から4年が経過した。ドイツの国民は美しい希望を抱いていた。だがすべての希望は無に帰してしまった。何もかもが我々が希望していたものとは違ってしまった。実現できたし、また実現しなければならなかった偉大にしてかつ輝かしい多くのものは、遂に生じなかった。神聖にして高貴な幾多の感情は嘲笑恥辱にさらされた。…ドイツの全君主のうち、ただ一人の君主のみが公約を守ってくれた。我々は現にこの主君の自由な国土で会合を催している」。

「公約を守ったただ一人の君主」が、テューリンゲンの領邦国家ザクセン・ヴァイマル・アイゼナハの君主であり、ゲーテの友人であり、かつゲーテのよき理解者であったカール・アウグストであることは、言わずして出席者の誰にも明らかであった。確かにかれは（既述のように）1816年5月5日に他の諸邦に先んじて憲法を發布した。「(自由のない小邦分裂国家群という)ドイツの惨めな現状に甘んずることなく、祖国の統一と自由のために全力を尽くそう」とリーマンは並居る学生に呼び掛けた。リーマンの演説が終ると、学生たちは再びコラール「いざや声打ちあげて奇しきみわざをほめ歌わまし」“Nun danket alle Gott”を合唱した。リーマンの祖国の統一と自由を訴える初日最初の演説は、ヴァルトブルク祭の雰囲気全体（言うなれば宗教性とナショナリズム気分）を決定づける影響力を多くの聴衆に与えた。

リーマン演説が(そのほんの一部分しか引用載録できなかったが)、聴く者にどれほどの感動を与えたかは、出席者の一人であるキーザー教授が回想録のなかで(いささかオーバー気味な表現だが)次のように記録している。

「聖なる静けさが集会を支配していた。…人生の厳粛さと時間の争いによってどんな甘ったれた感情にも心を奪われたことのない人たちでさえも、その目は感動の涙でいっぱい¹⁴⁾だった」。

フリース教授もまた感動を隠し切れぬ一人であった。リースマンの演説に続くコラル合唱のあと、フリースは一部の学生に促されて連帯の挨拶を述べたが、その際かれは「一つの神、一つのドイツの剣、名誉と正義のためのドイツの精神！」の金言を送って学生の掲采を浴びたという。ところでその数日後、フリースはある友人あての手紙でこう書いた。

「10月18日の午前、祝典のために私は学生たちにまじって陽光を浴びながら、ヴァルトブルクの中庭に立ちましたが、そのときの一瞬を私は我が人生の最もすばらしい瞬間と呼ばないわけにはいきませ¹⁵⁾ん」。

大広間での式典終了後に、前庭でオーケン教授の飛入り演説があったが、堰を切ったかのように流れ出た祖国の統一への熱望もまた、最初のフリースの演説による刺戟の結果であったろう。

4

ミネゼンガー広間での学生・教授・来賓の会食を済ませたあと、午後2時ごろに学生集団は再び隊伍を組んでアイゼナハの町に戻った。聖ゲオルグ教会で祝日の礼拝を終えると、学生たちは一般市民や地元の国民軍兵士たちとの交歓を楽しみ、体操家クラブ Turnerschaft 所属の学生たちは模範実技を披露したりした。夕方6時、再び学生たちは集まると、今度は松明を手を持って近くのヴァルテンベルク Wartenberg に向かった。午前の式典での集団陶醉にも似た感動の波は、若い学生のあり余るエネルギーを午後の礼拝と

市民との交歓会だけで収まるには、なお大き過ぎたと言ふべきだろう。学生全員が松明行列で夜祭りに急いだのも無理はない。ヴァルテンベルクに着くと、学生たちは待ちかねた国民軍兵士たちから打ち上げ花火の歓迎を受け、うず高く積まれた祝勝の薪（カール・アウグスト大公の指示によって用意されていた）に火がつけられた。

松明行列といい、祝勝の篝火といい、本来祭儀的・宗教的意義をもっていた中世ゲルマン民俗の夏至祭の大焚火 *Sonnwendfeuer* の世俗化現象とも、あるいは「ツンフト的な気晴らし」とも言うべき夜の集団のお祭り行事は、燃え上がる火とともに連帯的気分をさらでだに高揚させずにはおかない。いわば「創られた伝統」として青年集団のあいだに日常化・慣行化したキャンプ・ファイヤーは、ヴァンダフォーゲルやナチス青少年組織だけではなく、一般のキャンパーのあいだでさえ普通の現象である。ヴァルトブルク祭のためにドイツ各地からほとんど遠路はるばる徒歩で参集した学生たちが連帯感の高揚と友誼同盟の確認のために陶酔乱舞に近い気分に入ったであると想像しても少しも不思議はない。ヴァルトブルク祭のこの夜のプログラムが予定通り終了したあと、全員が打ち揃ってアイゼナハの宿舎に引き上げ、翌日午前の会合を持つだけでその日を終えたとすれば、一般通史にさえ特筆されることになったこの夜の事件は起こらずに済んだであろう。

ヴァルトブルク祭初日の第三部は、秋の夜空に燃え上がる焚火のもと、イエーナ大学哲学部の学生でフリースの門下生レーディガー *Ludwig Rödiger* の自作の愛国的歌曲「国民の憧れは燃える」の朗唱で始まった。レーディガーはこの夜の所定の弁士であった。午前のリーマンの抑制の利いた語調の開式演説とは違って、この夜の気分煽られてのことか、激越な口調でレーディガーはドイツの政府機関を攻撃し、表現の自由と政治的な決定に対する学生の権利を要求した。レーディガーの挑発的な発言・口調の基礎は、何よりもまず解放戦争中の公約が見掛け倒しに終って、ついに履行されずに終わったことに対する不満にあった。

「苦境のなかで一つの祖国を、すなわち一つの統一された正義の祖国を
与えるとの約束が我々に与えられた。だが大きな犠牲を払って手に入れた
連邦議会ははまだ開かれていない」。

だがこの約束破棄に対する怒りにもかかわらず、レーディガーは、解放戦
争を勝ち取ることによって、ドイツ国民は成長し、国民固有の力に目覚め、
祖国の運命についての共同決定の権利を導き出したのだと、戦争体験による
ドイツ人の国民的自覚を賞賛する。

「何となればドイツ人は一つのことを、すなわち自信の力をかち得たの
である。……祖国のために血を流すことのできる者は、どうすれば最もよ
く平和のときに祖国に尽くすかについても語るができるのだ。こうし
て我々は自由な空のもとに立ち、真理と正義を声高に口にする。何となれ
ばもはやドイツ人が狡猾な密偵や暴君の首切り斧をおそれることなく、ま
たドイツ人が聖なるものと真理を語る時に誰も気兼ねする必要のない、
そんな時代が有難いことにやって来たのだ。……我々はすべての学問が祖
国に仕えるべきであり、同時にまた人類の生活に仕えるべきであるという
ことを決して忘れまい¹⁶⁾」。

延々と続くレーディガーの長広告は改めて今読むまでもなく、当今の活動
家学生の貧弱極まるアジ演説とは比べようもないほど、その格調は高く、表
現は個性的である。がしかし声高で断定的な論調の一つ一つは、それなりに
一瞬ももっともと思わせるものが確かに少なくはない。がその実、全体を冷静
に考察すると、声高な主張の割には、楽天的な予言者風・警世家風の客観
性と脈絡とを欠いた、意外に内容の乏しい主張の連続でしかないことに気付
かざるをえない。

とりわけ、「祖国の統一と自由」という合言葉を表面立って唱えながらも、
その具体的な政策提案と見取り図は少しも示されない（これは、イエーナ・
ブルシェンシャフト結成時の「憲章」¹⁷⁾ [12.6.1815] にしても、全ドイツ・ブ
ルシェンシャフトの綱領的文書「原則と決議」¹⁸⁾ [18.10.1818] にしても事情に

変わりはない)。また戦争体験を過剰評価したり、官憲の弾圧のない時代がやって来たというような楽天的で現実離れした見通しを露呈したりしている点を見ると、レーディガーのこの夜の名文句としてよく引用される「祖国のために血を流すことのできる者は、平和時においていかに最もよく祖国に尽くすかについても語り得る」の折角の寸言も影が薄くならざるをえない。

聴く者をして陶醉の境に誘う演説というのは、えてして評価を二分させがちである。レーディガー演説が極度の反体制的危険を有すると見る官憲側と、同じレーディガー演説を青年のなかの青年の声として賞賛を惜しまぬ知識人とは峻別されるのも、その反響の大きさを物語って余りあると言えよう。レーディガー演説の官憲側の分析は「明らかに国家に対する反逆」(プロイセン警察本部長フォン・カンプツ)であり、「普遍的な共和政主義体制の願望」の表現(ベルリン駐在ロシア公使F.D.フォン・アロペウス)であるという危険信号の確認であった。たが他方、この夜のレーディガー演説に感動した陶醉派は、レーディガーこそ青年のかがみだとして賞嘆する。かれと一面識もないフェルノー Fermow なるプロイセンの一行政長官は、レーディガーに向う2年間の学資としての200ターラーを支払い、将来の就職先の面倒まで約束する。既述キーザー教授は、「レーディガーの演説は高度の感激をみなぎらせた。……ドイツ青年の祝祭は独特なものを自由に表現するときでも、その青年らしさを立証するのかもしれない」と賞賛する。¹⁹⁾

この夜のレーディガー演説がもたらした最大の(といっても例の焚書事件ではない)事件と言え、レーディガー演説が驚くなかれ、こともあろうにこれを読んだ68歳のゲーテをも虜にしてしまったということである。自分の演説にゲーテ閣下が「全面的な共感」を寄せていることを知らされたレーディガーは、この年の12月にゲーテ家を表敬訪問した。さてゲーテが後日イエーナの有名な出版者フロムマン Frommann 家の人々に内密に語った話だということだが、実はゲーテはこの青年が現れたとき、「この愛すべき青年の首っ玉を抱きついて、ぐっと強くキスしたい気持ちを、國務大臣として自制

せざるをえなかった」ということである。²⁰⁾

いかに時代がロマン主義的思潮の支配下にあったとはいえ、感情過多とも言える心理状態のなかに、若い学生たちならともかく、錚々たる教授連ばかりか、ゲーテのような揺ぎなき老大家（かれは「古典的なものは健康であり、ロマン的なものは病的だ」として、後者を否定的に評価したし、またイエーナ大学生の決闘沙汰と乱痴気騒ぎに対しては、大学管理者として嫌悪と反感の意向を表明したのだが）までを苦もなく誘い込んでしまわずにはおれない名状し難い一種異様な雰囲気、10月18日夜のヴァルトブルクに集まった学生集団をすっぱり覆っていたと言うべきだろう。午前中の祝典の感動が消えやらぬままに焚火を囲んだ学生群と、その前で（口角泡を飛ばしてであろう）熱弁を振る弁士とを支配していたであろうこの夜のムードが、演説終了後に学生歌と愛国詩の放歌高吟で終らせずに、言うなれば騎虎の勢でプログラム以外のものを生み出さずにはいられなかったであろうことは想像できないことではない。

レーディガーの演説をもって、この夜の祝祭は終わった。出席していた教授団の一人フリース教授はすでに早々と立ち去っていたし、来賓と学生の大部分もいっせいにアイゼナハの宿舎に向かって夜道を急いだ。あとに残ったのは、まだ物足りなさを感じていたのであろうほんの少数の学生であった。一般通史が洩れなく言及するあの事件、ヴァルトブルク祭をして歴史のなかにその名を刻み込ませた焚書事件は、これらの少人数のなかから発生したのである。

5

特定の出版物を火中に投じて氣勢を上げるといふこの夜の集団的愚行は、ヴァルトブルク祭の名を史書にとどめる役割を果たしたと同時に、式典の主催者であったブルシェンシャフトをして悪名高きナチス学生同盟の焚書事件

(1933)の先駆者としての汚名を被らしめる役割をも果たした。1817年10月18日夜の出来事は、この夜の雰囲気に酔った一部学生のハプニングなどではなく、この夜の雰囲気づくりに肩入れしながら、前もって周到に用意された計画的犯行であったことは、疑いなく明らかである。学生の大部分が帰ってしまうや、(同時代人の描いたいくつかの銅・木版画から読み取れるように)大きな籠の中から争うように本を取り出して火中に投げ入れたり、大きな熊手の先に反ドイツ・反動的象徴とされる三幅対(プロイセン槍騎兵の胴衣、ヘッセンの18世紀風弁髪、ナッサウとオーストリアの軍隊指揮棒)を引っかけて、(何やら叫び声を挙げている様子で)火中にくべる帯剣姿の学生と兵士たち(軍服・軍帽・革長靴・サーベルを着用)の姿が描かれている。

大きな籠といい、熊手といい、前もって学生あるいは兵士たちがヴァルテンベルクに運んでおいたものだろうし、焼却された30冊近くの出版物が(そのうちコツェブーやハラーやカムプツの書物を除けば殆ど無名に近いだけに)、ヴァルトブルク祭当日ないし前日・前々日に、(イエーナやライプツィヒのような学都ならともかく)アイゼナハのような地方の小町で短期間に集められるはずがないことを考えると、この夜の祝祭後の狂乱は、どう見ても一部はね上がり学生の突発的暴走などと断定できぬ性格を持っている。この夜の集団行動を「市民的民主的勢力の反抗の表現」、だの、「ヴァルトブルク集会の圧巻であり結論である」だのという評語(旧東独の評家に往々見られる)²¹⁾は、イデオロギー的思考に毒された言葉のもてあそび以外の何物でもない。そこには、イエーナ・ブルシェンシャフトへの共感から薪の手配まで町当局に用意させたカール・アウグスト大公の好意を無残にも傷つけ、あまつさえブルシェンシャフトに末代までの拭い難い汚名を与えてしまった一部の過激な計画的犯罪者の非人間的行動に対する糾弾の姿勢は全くない。しかしなにはともあれ、この夜の焚書事件が意図的計画的にかなり前から画策されていたことは、この事件の主謀者と見られるマースマン Hans Ferdinand Maßmann (のちベルリン大学教授)の言動が明らかにしてくれる。

マースマンはすでにベルリンのギムナジウム時代に、ヤーンの最初の弟子たちの一人として、ハイゼンハイデのベルリン体育場で訓練を初めた。1816年の春、かれはヤーンの要望に従ってベルリン大学神学部を中退してイエーナ大学に転学した。²²⁾ イエーナにはすでに1815年6月12日に結成されたドイツで最初の学生組織イエーナ大学「ブルシェンシャフト」(19世紀中葉以来、とくに第二帝政成立後、今日に至るまでの体制内化した学生団体 *Korporation* ないし *Verbindung* に属する「ブルシェンシャフト」²³⁾) と区別する意味で“*Urburschenschaft*”と呼ぶ) が活動していた。マースマンのイエーナ転学の目的は、“*Burschenschaft*”という名称の生みの親でもあり、イエーナ・ブルシェンシャフト結成の影の首謀者でもあったヤーンの要望通りに、ヤーンが1812年に起草した「ドイツ・ブルシェンシャフトの組織および設置」²⁴⁾の構想を、つまりブルシェンシャフトの全国的結核化と体操訓練の普及をイエーナ大学を拠点として、ドイツ諸邦の全大学に拡大することであった。

ヴァルテンベルクで焼かれた出版物のうち、ヤーンの人物・主張・体育運動を批判・中傷した印刷物が相当数を占めていることから、当夜の焚書事件がヤーンとその随一の愛弟子マースマンとの合作による気配は疑いないとしても、マースマンがヴァルトブルク祭の機会を利用して、焚書の同志を何時どういうふうを集め、またどう打ち合わせたか、その手順を窺わせる資料は残念ながらない。しかし、ゲッティンゲン詩人同盟の焚書事件(1772)への文学史的回想に基づくような甘い感情移入による行動でなかったことは確かだ。ルターの決然たる行動こそが、むしろ焚書事件の正当化に役立てさせられたのである。

1520年12月10日にマルティン・ルターがヴィテンベルクのエルスター門の前で、法王レオ10世の「破門状」*Exsurge Domine* (*Erhebe dich, Herr!*) を公衆の面前で焼き払った故事を、マースマンはまず学生たちに思い出させ、それからこう語る。

「こうして我々は、祖国を弁舌と行動を通して恥ずかしめ、自由を圧殺

し、生活と著作のなかで真実と美徳を中傷してきた人々の思い出の品々を炎にくべて片付けようではないか……」

この煽動的な演説に続いて、マースマンは反動的・反ドイツ的・反ヤーンの出版物の名を次々と挙げ、それに従って学生の何人かが火中に投じた。ここで焼かれた30篇近い出版物を分類したり、その書名を列挙する作業は他に譲るとして、この焚書事件で注目すべきは出来事は火にくべる前にユダヤ人作家アッシャー Saul Ascher の名が呼び上げられたときに、火を取り巻いていた学生たちが一斉に「ユダヤ人くたばれ」Wehe über die Juden!と叫んだという事実である。フリース教授がブルシェンシャフト学生たちに及ぼした精神の影響の大きさは、かれの哲学の中核の一つである「確信」Überzeugungの論理だけではなく、反ユダヤ主義の鼓吹であった。²⁶⁾19世紀中葉以降の排他的な学生諸団体の根強いユダヤ人学生排除の根源は、ヤーンとフリースの学生に与えた影響の大きさに基づくといいよ。

だがそれにしてもここに一つの疑問が残る。それは Student の代わりに好んで“Bursche”²⁷⁾という古語を用い、学生の全国組織を Burschenschaft の名のもとに構想して、イエーナのブルシェンシャフトに次いで、「全ドイツ・ブルシェンシャフト」Allgemeine Deutsche Burschenschaft を創設させた影の功労者であったほかならぬヤーンが、ブルシェンシャフト主導のヴァルトブルク祭に、とりわけ祝祭初日の夜の儀式になぜ参加しなかったのだろうかということだ。1819年に体操場が閉鎖されて、かれ自身が拘禁されるまでは、かれは自由に講演も旅行もできる機会をもっていたはずである。堪繰ってよければ、この頃ヤーンは黒幕的存在として愛弟子マースマンを手先に使って、イエーナ・ブルシェンシャフトに君臨していたのだとも言えよいのだろうか。

狂乱の夜が明けた10月19日、ヴァルトブルク祭第2日目の朝、昨日とほとんど同数の学生がヴァルトブルク城内に集まった。来賓と教授の出席はなかった。全ドイツの学生を統合する自治的統一的な組織の結成、言うなれば学生議会 Studentenparlament の成立が、この集会の目的であったからである。初めに、昨夜の演説者レーディガーが、フリース教授の小冊子「ドイツの学生諸君に告ぐ」Rede an die deutschen Burschen を（例によって感動もあらわにであろう）読みあげた。「青年の神聖なる友誼同盟」と「精神の自由と国民的平等のための闘争」を促すフリースのメッセージが読み終えられたところで、本日の弁士としてハイデルベルク・ブルシェンシャフトの指導者であるカロヴェ Friedrich Wilhelm Carové が語った。この時カロヴェは28歳で、集まった学生のうち最年長であったが、それだけにその豊かな人生体験と、出生の環境に基づく思考の幅の広さは、北部・中部ドイツ出身の学生たちとは雲泥の差があった。

コブレンツ生まれのカロヴェは、ギムナジウム在学時代にラインラント占領のフランス軍による西欧的・民主主義的な政治改革を身をもって体験した。ハイデルベルク大学でヘーゲルの門下生となり、その地にブルシェンシャフトを組織（1817）した。かれは人並以上の愛国者であったが、ヤーン流のフランス人憎悪とユダヤ人排斥には絶対に組しなかつた²⁸⁾。カロヴェの思考の原点は（かれはヴァルトブルク祭参加者にしては珍しくカトリック教徒であった）、北方的・ルター的・反西欧的な心情の上に成り立つブルシェンシャフトとは異質であり、短絡的な暴発的傾向に陥り易い性格とは異縁の、いわば南西ドイツに特有の開放的な明澄さ（ベルリンから「ライン河上流の文化圏」に赴任したときのマイネッケとヴェーバーの印象にも似た）に基くものであった。

カロヴェは、「市民的自由と偏見なき自由の理念を目覚めさせ、真の人間の尊厳の証人を要求した」精神こそ、1789年のフランス革命から生まれたものであることを、学生たちに銘記させようとした。²⁹⁾ (未完)

注

1) 再統一後の今でこそ、ドイツ全土から多くの観光客が誰でも自由に訪問できるようになったものの、再統一前の旧東独 SED 独裁体制の暗黒時代には、Wartburg は「ベルリンの壁」に匹敵する対 BRD の強固な文字通り「城塞」であった。1967年、FDJ 主催のヴァルトブルク150年祭に際して、西ドイツの学生連盟組織のヴァルトブルク参加申込みは、Wartburg-Tradition に適しないとして全面的に拒否された。BRD と西ベルリンの代表的学生団体である「ドイチェ・ブルシェンシャフト DB」と「ドイツ学生連合 VDS」2 団体は、「帝国主義的・報復主義的・反共主義的・軍国主義的」とのレッテルを貼られて入国すらできず、次の 3 団体「ドイツ自由学生同盟 LSD」「社会民主主義大学連盟 SHB」「社会主義ドイツ学生同盟 SDS」だけは、その代表者の参加のみが認められた (SED 中央委員会機関誌 "Neues Deutschland" 15. Okt. 1967 ; EDJ 編集の学生新聞 "Forum" 11/1967)。

25年前に、FDJ とその従属諸団体は BRD の学生を排除して、ヴァルトブルク150年祭を「体制に忠実であるための表明」と「当面するドイツ [DDR] 政策の Propagandaforum」の場として、「ドイツ統一のシンボルとしてではなく、政治的・精神的な対決のシンボル」たらしめようとしたが、その悪夢の時代も、今や「壁の崩壊」とともに終わった (Vgl. W. Gersdorf : Das Wartburgfest und die SED, in : Gewerkschaftliche Monatshefte. 18. Jg. 1967 S.746—752)。再統一後の今日、ヴァルトブルク城は誰でも自由に参観でき、DM6,00を払えば本館(パラス)を心ゆくまで見学できるし、また

併設のホテル (Hotel auf der Wartburg) に泊まって、ゲーテが嘆賞し満喫した周囲の自然の美しさを追体験することもできる。

2) Wartburg の築城者 Ludwig der Springer は、テューリンゲン方伯ロドヴンガー族 Lodwinger の始祖 Ludwig der Bärtige の息子。der Springer の異名の由来は、何かの不法行為のためにハレのある城塞に監禁されていたときに、大胆な跳躍でザーレ川に飛び込んで難を逃れたという故事に基づく。また Wartburg の名は、1067年に跳躍伯が狩の途次に立ち寄った山頂で、"Wart' Berg, du sollst mir eine Burg werden!" と叫んだという伝説 (「方伯の間」における1855年の Moritz von Schwind のフレスコ画) に由来するという (何やら出来過ぎの感なきにしもあらずで、真偽のほどはわからない)。Günter Schuchardt : Die Wartburg—Von der Grenzwarze zum Nationaldenkmal, 1990 S. 11f. ; Bibliographisches Wörterbuch zur dts. Geschichte, 2. Bd. (1974) S. 1706ff. u. a.

3) ルターを「ドイツの自由の墓掘人」「ドイツの反革命の最も偉大な精神的立役者」と見たり、「権力に庇護された内面性」への傾斜と「官憲的権力への屈從的な臣民根性」をドイツ人のなかに叩き込んだ保守反動の張本人として、ルターの意義を殊更に否定的に観察するドイツ批判的・イデオロギ－的の見解は、さすがに解消されたとは言え、今なお一部には残存する (旧東独史学におけるルター像の変遷については以下を参照。Jan Hermann Brinks : Die DDR-Geschichtswissenschaft auf dem Wege zur dts. Einheit, 1992. S. 225-261。

ともあれ、ルターの否定的側面が殊更にどれほど増幅されて挙げられようと、宗教改革運動においてルターが身をもって示した現状打破的・革新的エネルギーは、新しいものを生み出すべき絶対の条件として、積極的に評価されねばならない。

4) 「目下当地に滞在しています。そして苦痛と狭苦しきのなかから再び私を天国と壮観のなかに送ってくださった主のために、私は賛美歌を歌います。

公爵が私を当地に来られるよう機会を与えてくれたのです。……この山頂の素晴らしさ!景色は椅子から思わず立ち上って眺めるだけの価値があります。この景観をあなたのために送って差し上げることができればと思います。……スケッチすることができれば、私は狭い片隅の小景を選びます。何となれば、自然はここではどこから眺めても余りに広大で素晴らしいからです!しかしそんな片隅でも、ここはそうなのです!……」(13. 9. 1977 夜9時)。

その翌日、ゲーテはこう書く。「この宿泊は私が体験した最も素晴らしいものです。非常に高く楽しく、ここでは客でありさえすればいいのです。さもないと天国と楽しみを味わえないことになるでしょう」(An Charlotte von Stein, Wartburg 13—16. Sept. 1777)。(Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche, Bd. 18. (Briefe der Jahre 1764—1786). Artemis Verl., 2. Aufl.1965, S. 367ff.

5) An J.C.Kestner, Wartburg 28. Sept. 77, ebd S. 370

6) 1815年のウィーン会議の領土規定 (Art. 34—36 des Kongreßaktes) により, Herzogtum から Großherzogtum へ, 更に同年プロセインとの条約 (Vertrag 1, 6. 1815/22. 9. 1815) によりプロセインの一部領域を獲得して Sachsen-Weimar-Eisenach となる (E.R.Huber : Dts. Verfassungsgeschichte seit 1789, Bd. I. S. 578)。

ゲーテのヴァルトブルク初訪問以前にヴァルトブルクに言及した記録としては、1728年に発行されたライプツィヒ大学史学教授メンケ(J.B.Mencke)のテューリンゲン方伯妃エリーザベットの生涯に関する著述だけであったこと (G. Steiger : Urburschenschaft und Wartburgfest. Aufbruch nach Deutschland, 2. bearb. u. erweiterte Aufl. 1991 S. 16) を思えば、ゲーテのヴァルトブルク礼賛記事の後世に与えた意義は途方もなく大きい。ゲーテのヴァルトブルク初訪問から15年後の1792年に出版された地元アイゼナハの財宝顧問官トーン (J. C. S. Thon) の最初のヴァルトブルク案内

書『ヴァルトブルク城』Schloß Wartburg は、1824年までに4版を重ねたというが (Schuchardt, aao S. 64), それほどまでにヴァルトブルクへの関心を喚起させた基因は、ゲーテのヴァルトブルク訪問なしには考えられない。

ついでながら、『素描画家としてのゲーテ』(W.ヘイト著, 相良他2名訳, 1984) に採録されているヴァルトブルク初訪問・滞在時のゲーテ自身の素描 (全12点中の5点のみだが) は、当時のヴァルトブルクの外観を知る貴重な記録である。

7) Schuchardt, ebd S. 65. 晩年のゲーテがいかにヴァルトブルクをドイツ古来の伝統芸術の宝庫たらしめようと努めたかは; フォークト宛書簡に見られる (27. 11. 1815; 21. 2. 1916; 10. 5. 1816 usw.). H. Tümmeler (Hg.) : Goethes Briefwechsel mit Christian Gottlob Voigt, Bd. IV. Weimar 1962, S. 172f, 195f, 220.

8) ヴィーン会議後2年目の、いわゆる「3月前期」(Vormärz) 中に、宗教改革300周年記念と解放戦争勝利4周年を記念し、合わせて全ドイツ学生の統一的组织づくりを目的とする学生集会を開催できる場所とえば、どう考えてもカール・アウグスト大公の領内でしかなかったであろう。宗教改革記念ならヴィテンベルクで、また対仏祝勝記念ならライプツィヒで開催されてこそ、その場所の象徴的意義からしても、むしろ相応しかったかもしれない。

だが危険人物視されていたヤーンと、かれの体操家連盟 Turnerschaft の影響のもとでの組織とみなされた Jenaer Burschenschaft 主催の集会となれば、当時としては珍しく表現の自由が憲法上保障され、かつブルシェンシャフトに終始好意的なカール・アウグストの領内でのみ開催可能であったことは容易に理解できる。事実、カール・アウグストは、ヴァルトブルク祭後のプロイセンとオーストリア両強国政府の手厳しい内政干渉に対して一歩も譲ることなく、毅然たる態度を持ち続けたことはよく知られて

いる。Huber, aaO S. 721 ; Fritz Hartung : Das Großherzogtum Sachsen unter der Regierung Carl Augusts 1775—1828, 1933, S. 422f.

9) Zit. n. Schuchardt, aaO S. 70

10) 1817年10月18・19両日のヴァルトブルク祭の一部始終は、当時の目撃者・体験者の記録・資料類の検証に基づいて書かれた以下の叙述的研究文献に、その多くを負っている（そのうちの最重要の基礎的文献のみを列挙する）。

H.Haupt : Die Jenaische Burschenschaft von der Zeit ihrer Gründung bis zum Wartburgfest. (Quellen und Darstellungen zur Geschichte der Burschenschaft und der dts. Einheitsbewegung (=QuD), 1. Bd. 1910, 2. Aufl. 1966

P. Wentzcke : Geschichte der dts. Burschenschaft I. Vor- und Frühzeit bis zu den Karlsbader Beschlüssen, QuD. 6. Bd. 1912. 2. Aufl. 1965

F.Schulze u. P.Ssymank : Das dts. Studententum von den ältesten Zeiten bis zur Gegenwart, 1910 (2. Tl. 1—4. Abschnitt)

G.Steiger : Urburschenschaft und Wartburgfest. Aufbruch nach Deutschland, 2. bearb. u. erw. 1991

11) 1817年当時のドイツ大学の学生総数は、部分的な統計資料の不備と統計処理法の違いにより、多少のバラツキは免れない。ここでは比較的信頼できる（とはいっても完全ではないが）資料として Steiger の統計に従う。

大学名	所属国家	学生数	調査対象年
ヴィーン	オーストリア帝国	957	1818
プラハ	〃	880	1818
ベルリン	プロイセン王国	600	1817
ブレスラウ	〃	366	1818

ハレ	〃	500	1816
グライフスヴァルト	〃	55	1818
パーダーボルン	〃	?	
ランツフト	バイエルン王国	640	1815
ヴェルツブルク	〃	365	1815
エアランゲン	〃	180	1818
ライプツィヒ	ザクセン王国	911	1816
ゲッティンゲン	ハノーファー王国	1132	1816
チュービンゲン	ヴェルテンベルク王国	290	1818
ハイデルベルク	バーデン大公国	363	1817
フライブルク	〃	275	1817
マールブルク	クーア・ヘッセン	197	1812
ギーセン	ヘッセン大公国	241	1813
キール	ホルシュタイン大公国	107	1818
イエーナ	ザクセン・ヴァイマル大公国, 他チューリンゲン3公国	600	1817
ロストック	メクレンブルク・シュヴェリーン大公国	159	1817

(G. Steiger : "War Roth Schwarz und Gold..."—Essay zur Geschichte der Jenaer Burschenschaft von 1815 bis 1819, 1987. S. 19f ; ders, aaO S. 280f)

以上の合計8818名に、シュタイガーに欠けているパーダーボルン大学学生数の1816/20年の5年刻みの平均数60名(W.H.プラール『大学制度の社会史』山本訳1988資料13)を加えると、1817年前後のドイツ連邦内の学生総数は、(1818年開学のボン大学を除いても)大凡9000名と算定することができる。

なお、祝典参加学生約450名のうち、参加者名簿に記名した366名の氏

名, 出身, 所属大学・学部などの詳細なコメントについては次を参照。

G. Steiger : Die Teilnehmerliste des Wartburgfestes von 1817—Erste kritische Ausgabe der sog.”Präsenzliste“,Darstellungen und Quellen. Zur Geschichte der dts. Einheitsbewegung im 19. und 20. Jahrhundert (=DuQ) Bd.IV.1978 S.65—133

- 12) Litewka と呼ばれるこの軍服は, 現在のイエーナ大学本館講堂 (Aula) の舞台正面に掲げられているスイスの画家ホードラー Ferdinand Hodler の油絵大作「1813年解放戦争に出陣するイエーナ大学学生たち」(1808/09) と, イエーナ市博物館 Stadtmuseum の展示品で確認することができる。
- 13) リーマンの演説全文は G. Steiger : Urburschenschaft u. Wartburgfest (1991) S. 250—252に収録されたものに従う。
- 14) zit. n. G. Steiger, ebd S.113 u. a.
- 15) zit. n. ebd. S. 114 u. a.
- 16) G. Steiger, ebd. S. 116—121 u. a.
- 17) Die Verfassungsurkunde der Jenaischen Burschenschaft von 12. Juni 1815 (hrsg, v. H. Haupt) QuD, Bd. I. S.114—161
- 18) Die Grundsätze und Beschlüsse des achtzehnten Oktobers (hrsg. v. H. Ehrentreich) QuD, Bd. IV. S.109—129
- 19) G. Steiger, ebd S.121f
- 20) H. Haupt : Goethe und die deutsche Burschenschaft, QuD, Bd. VIII (S. 1—30) S. 9
- 21) 革命的勢力としてのブルシェンシャフトの高い評価と, それに基づく実証主義的な歴史研究は, 旧ドイツ史学においては, 青年・学生への指導理念の提示という教育的・イデオロギー的側面からも重要な役割を負わざるをえなかった。これらの問題に関しては下記を参照せよ。

G.Heydemann : Napoleonische Fremdherrschaft, Befreiungskriege und Anfänge der deutschen Burschenschaft bis 1818 im Urteil der Geschicht-

swissenschaft der DDR, DuQ, 12. Bd. 1978 S. 7—104

- 22) M. Markert : Hans Ferdinand Maßmann—Redner und Dichter der Urburschenschaft, in : Wissenschaftliche Zeitschrift der Humboldt-Universität zu Berlin. Gesellschaftsw. R. 36 (1987) S. 546—554
- 23) この問題についての議論は、拙論「ブルシェンシャフトの栄光と挫折」（大学史研究会編「大学史研究」第8号1992年8月、39—56頁）を参照されたい。
- 24) F.L. Jahn : Ordnung und Einrichtung der deutschen Burschenschaften, 1811, in QuD, Bd. VI S. 81ff. ヤーンはこの計画書をベルリン大学第2代総長フィヒテに提示したが、フィヒテはヤーンの提案を黙殺した（この間の両者の対応関係なり見解の相違なりについては QuD. VI S. 81—85 ; Huber, S. 707f. を参照）。
- 25) Steiger, aaO S. 123—126
- 26) フリース哲学の Überzeugung 概念については、Huber : Dts. Verfassungsges. Bd. 1 S. 711—717, 729—731, Überzeugung 概念とブルシェンシャフト学生をめぐるヘーゲル対フリースの確執については前述の拙論「ブルシェンシャフトの栄光と挫折」47—51頁、またフリースの反ユダヤ主義問題については、J.F. Fries : Über die Gefährdung des Wohlstandes und Charakters der Deutschen durch die Juden, 1816 (Sämtliche Schriften in 26 Bdn. Abt. 6. Bd. 25)
- 27) 1810年代にヤーンの出現によって”Student“の意味に定着した Bursch の語義の変遷の簡潔で要領のよい記述については、以下を参照。Otto Böcher : Kleines Lexikon des studentischen Brauchtums, 1985 S. 5—7
- 28) F.W. Carové については NDB, Bd. 3. S. 154 ; ADB, Bd. 4. S. 7 f. そのほか『ベルリンのヘーゲル』（J・ドント著、花田／杉山訳 1983）の各所における言及などを参照。
- 29) Vgl. Steiger, aaO S. 131ff ; S. 253f.